

令和8年1月 教育委員会定例会（意見交換）

開催日時：令和8年1月27日（火）

テーマ：支援を必要とする子ども・若者の生きぬく力の育成と社会参画
について

【意見交換】

○教育長

これまでからも説明しているように、第3期の近江八幡市教育大綱の策定が進んでおり、教育委員会においてはそれに続く教育振興基本計画の改訂も視野に入ってきている。今年度、定例教育委員会においては、委員の皆様のご自由な意見交換を重ねてきたが、本日は、「支援を必要とする子ども・若者の生き抜く力の育成と社会参加」をテーマに、ご意見を頂戴したい。

○大更委員

近江八幡市では子ども・若者育成事業「008」を実施しているが、民間等においても、いろんな支援団体が若者たちの居場所づくりを立ち上げておられ、そうした場所で活動されている方、心を強くしている子どもたちもたくさんいると思う。支援団体であるとか、居場所づくりをされているところでは、どのようなケアがされているのか、ノウハウを共有し合うことも大事になってくる。そこで活動している子どもたちや、職員の方にも聞き取りができれば、そういうものを市でもまた同じように取り組むとなると、いい部分を使わせてもらおう。いいところ取りを皆で考えていくような機会が必要かなと思う。

○教育長

「008」を組み立てていく段階で、今お話しいただいたような議論をしながら、市内で就労支援に取り組んでいる団体にも話を伺った。就労の形はさまざま、大企業での雇用だけでなく、支援を受けながら自立して店を開くといった事例もある。そうした中で、関わり方や支援の仕方、本人が自分の才能や興味に気づいていくための寄り添い方などは、とても参考になると感じており、可能であれば、そうしたノウハウを持つ方にも「008」の取り組みに参加してもらいながら進めていきたい。市の施策として、例えばSSRや、相談業務、「あすくる」の取組、中学校を卒業してから高校訪問によるその後の生徒の状況の把握等、行政の取組というのは多層にわたっており、学校園におられる間については、ほぼ間違いなく繋がりができていると思う。ただ卒業され、そこから離れた途端に、家に閉じこもって外に出られなくなる若者もあり、そ

ういった方々に対して、行政としてどのような支援ができるのか。自分の才能や興味関心を伸ばす中で、少しでも社会参画をしていただけるような取組が、これまで市としては無かったので、今後しっかりと施策を打ち出していこうという趣旨である。決して市の施策だけで出来るというのではなく、市がそこまでしっかりやっているのだったら、市と連携して、市全体の社会参画をみんなで一緒にやっていこうと民間の方々にも思ってもらえるように、その中心になれば、もしくは伴走的なものでもいいが、施策としてそういうものを打ち立てていくということに意味があると思っている。

○大更委員

「あすくる」や少年センターとの関わりも、今後ますます重要になると思うが、それだけではなかなか厳しいものがある。他市で、企業で経験を積んでもらい、次のステップにつなげるという取組をしている団体があったと思うが、そういう支援団体や組織と繋がることで、行政として、アドバイスの部分を担うことができないかと思う。

○教育長

県内にもそういう取組をされている団体等があったら、連携はこの「008」でもさせてもらおう。ただ、「008」が単なる振り分けの機関になってはいけなないと考える。主体性をしっかり持って、自ら社会参画に繋げていくという取組を持続させつつ、他の団体と連携しながら、当該子どもなり若者の社会参画の幅や可能性を広げていくという連携は大いにしていくべきだと思う。もう一つは、民間も含め、あるいは学校現場、「あすくる」も含めて、本市で子どもや若者を繋ぎとめていただいている既存の団体等において、子どもたちの興味関心のあることを発見できたその段階、また次のステップで、団体だけでは社会参画に繋ぐところまではなかなか難しい場合に、ぜひ「008」に繋いでいただければと思う。その後、子どもたちが、興味関心を広げ、社会体験を徐々に重ね、自信を持って社会参画していただけるところまで、「008」がしっかりとさせていただく。もし皆さんに認めていただけるぐらいの取組になれば、安心して引き継いでいただけるし、結果として、例えば、人とうまく関われないタイプの若者、子どもさんであっても、あるいは医療的ケアを必要とする方でも、興味関心を持ち社会にこのような貢献をしたいというような意識のある方については、「008」でしっかりと受け入れて、例えば看護師を置いて対応するというような実行体制も徐々に備えていきながら対応できればよいと考えている。そのためには、人、金、モノも必要になってくるので、限られた本市の財源の中から、どのように優先的に財源を配分するのかという、そういうプロセスを経た上で、「008」の機能の積み上げをなめらかにゆるやかに高めていきたいという思いである。

○西田委員

「008」に関連して、若者が、各自それぞれ考えるゴール、例えばこの活動をすることで就職したり独立する、或いはそこまではいなくても、とりあえず家から一歩出るきっかけにしたい等、いろいろなゴールがあると思うが、そういう方たちの背中を押してあげるというか、手を引いてあげる、或いは一緒に歩いてあげるとか、そういうことになっていくのかと思う。

YouTubeによる問い合わせ数等は増えているのか。

○教育長

第1回のワークショップを開催したとき、30人とか40人ではないが、小学生から40歳近くの青年の方まで、バラエティに富んだ対象の方が集まられた。年代別に4班にチーム分けし、例えばバームクーヘンや赤こんにゃく、近江牛等、近江八幡市にちなんだ発想をそれぞれの参加者にしていただき、いわゆるショートショートという小さな小説みたいなものを皆で作りと、それを発表し合った。実際そこに参加していた小学生の子どもたちは、1人では座れなくて、横に保護者の方が付き添っておられる状態から始まったが、皆でそのショートショートの小説を考える中で、だんだんと生き生きとして、若者についても、きちんと意見を交換しながら、最後は1人ずつ、全員がショートショートと言われる小説を作った。発表も余りしたことがないという子どもさんが、皆の前でマイクを持って自分の小説を発表される。自分の発想でそういうものができる、僕もできるという喜びを感じておられた。最後の集合写真では、保護者の方の言葉を振り切って、走ってセンターに行く。解散の後、皆さんがもう、来られたときとは全然違う顔をされていたのが印象的で、そういう意味で、決して人数的に多くの方が集まったわけではないが、年齢層も様々な方がおられ、取組の手応えを感じた。そういう輪をもっと広げていくというか、ワークショップを重ねていくたびに、そういう方たちに「008」の取組の良さをわかっていただけたらと考えており、このショートショートの小説に関わるような流れの中で、次のワークショップを今企画しているところである。そういうことを積み重ねていく中で、自分の本当の興味関心にも気づいていただければ、気づいていただけたらそのことをテーマにして、例えばクリスマスマーケットに参加してみるとか、そういう社会体験を皆がサポートする中で、その体験からまた次のステップで、例えば自分の詩を書いて発表するとか、文化祭に絵を描いて出してみる等、一歩でも社会参画に繋がるような、繋いでいけるような取組を育てていくしかないと感じている。

○圓山委員

支援を必要とする子どもさんの保護者は、子どもの将来についてすごく早くから悩まれている。義務教育終了後の進路や就職について、将来を見据えた相談窓口の紹介をできるだけ早い段階から、細やかにしてあげてほしいと思

う。

発達障がいのある方で、手帳の交付を受けて就職先が見つかったという声を聞いたことがある。学校卒業後、子どもたちの将来の就職まで繋いでいただけるよう、教育委員会と福祉部局等との連携をお願いしたい。

○教育長

今回の取組は、生涯学習の範疇で積極的に施策を打ち出そうとしているが、教育委員会の両輪である社会教育と学校園教育、そういうものと福祉との連携が0歳から就学前においても必要であり、また中学校を卒業してからも必要である。大事なご指摘をいただいたと思う。

○重森委員

まずこの定例会で、こういうテーマを設定していただけたことが、とても嬉しく、また有難く思う。私が関わってきた子どもさんの中に、自己肯定感が全く育っていない子ども、例えば、漢字を覚えたいと思っているのに、他の人は漢字を1行書き取りしたら覚えるのに、僕だけノート1冊使っても漢字が覚えられない、どうしたらいいだろう、という子どもがいた。普段は普通にしており、そんな困難さやしんどさを全く感じさせなかったが、口に出してくれたことで、その子のしんどさに気づかされた。でも、あなたが悪いわけではないよ、ということで子どもと関わっていくうちに、他の悩みもどんどん伝えてくれるようになった。やはり、子どもと関わる大人がそばにいて、子どもの成功体験を増やし、自己肯定感を育てていくような機会をたくさん仕掛けて、大人や周りの子どもたちと一緒に、楽しい、もっといろんなことをしてみたいと思えるようにしていくのが良いのではないかと思う。「008」に来られる子は、一歩踏み出して、活動に参加してみようという気持ちになってくれている子どもということで、やはり常日頃関わる保護者や学校の先生、子どもの気持ちを引き上げてくれる人が、身近にどれだけ多くいるかが大切だと思う。そうして、やってみよう、チャレンジしてみようという気持ちを持てるようになる子をたくさん作っていったらよいと思う。気持ちの部分だけでしんどい思いをしている子も結構いるので、その辺をやっていったらよいと私自身思っている。

○教育長

大きなヒントをいただき有難く思う。実際、学校現場でSSRや相談業務、特別支援等を行っているが、そんな中で、子どもたちが自分の興味関心を示し出し、それをもう少し伸ばしてあげたいと思ったときに、「008」に繋がれば、あとは「008」で伸ばしてもらえるとというような安心感。既存のいろんな関わりを持っていただいている方々にとって、いつでも繋ぐ場所があるという安心感となるような、そういう連携ができれば、「008」の意義も大きいと

思う。

その他、教育大綱や教育振興基本計画をこれから検討するにあたって、お考えのこと等あれば、お伺いしたい。

○大更委員

今度新しい教育課程が始まる。新しい教育課程では、これまでと違って、学校現場に合わせて、より自由に子どもたちのためになるような教育課程を編成することが可能になってくると思う。学ぶ力や生き抜く力、創造する力が中心に置かれているが、せっかくこれほど弾力的に教育課程を運用できるのであれば、そこに支援が必要な子どもや、なかなか自分の気持ちをうまく表出できない子どもへの手当等、その辺のことをやはり入れていきたい。授業数として学ぶ力と生きる力が積み上がっていくという部分もとても大事だが、支援を必要とする子どもに対してのちょっとした新しい教育課程というか、配慮できるようなものがあるのもいいのではないかと思う。ある程度は戦略の部分に謳われているが、余白の創出の中にも、そういう教育課程を考えていければよいと思う。

○教育長

今おっしゃったように、創出した余白の時間を利用し、特別支援や医療的ケアを必要とする子どもたちの生きる力をどのように育てていくのか、具体的なカリキュラムというか、そういうものを開発していく必要がある。おそらく5分の授業を短縮すると、年間1,015時間、127コマの余白が新たに生まれる。この127コマを、子どもたちの新たな学習時間として確保することもでき、教員の研修や授業準備等に当てることもでき、学校サイドで自由に使えるような新学習指導要領となる見込みが大きい。この時間を使って、特別支援を必要とする子どもたちの生き抜く力を育むために、どのような学習があり得るのかということ、今からやり方、カリキュラムも含めて検討し、そういう時間を作り上げる必要がある。

○重森委員

総合的な学習の時間ができたときもそうだったが、現場裁量が大きくなって自由度がここまで高まるほど、現場では何をしたらいいのだろうという思いになると思う。今回教科担任制で剣持先生を呼んでいただいたり、先進事例を紹介していただいて、勉強する時間を設けていただいたのは大変有難かったが、やはり現場の先生方が、自由裁量が増えた分をどうしていったらいいのかと迷わないように、こういう例もある、こういうこともできるというヒントをたくさん散りばめていただくと有難い。そうすると、余白を有効に使えるだけの知恵が皆さんにできてくると思うので、その辺の種まきを十分にさせていただきたいと思う。

○教育長

大変重要なお話をいただいた。教育研究所から一般的な探究学習についてのご報告をいただいているが、いわゆる特別支援教育に的を絞った余白をうまく活用した特別支援の在り方についても今後研究が必要になってくるのかなと思わせていただいた。

本日の意見交換は以上とさせていただきます。